

③山梨民医連活用実践

～ラダーに位置付けた研修・事例分析の取り組み～

*活用実践の詳細はさらに看護HPにて紹介



研修名：看護委員会・キャリア開発ラダー運営委員会主催
ラダーレベルⅢ以上 県連研修会 開催要項

テーマ：民医連の看護について考える
『民医連のめざす看護とその基本となるもの』事例分析発表会



研修のねらい

- 1) ブックレットを活用した事例分析の方法を理解する
- 2) 民医連の看護の基本となるものを理解し確信につなげる
- 3) 次世代を担う看護者として民医連の看護を継承する一員としての自覚をもつ

事例 筋萎縮性側索硬化症を抱えたA氏を通して見出したあきらめない関わりの軌跡

事例紹介：A氏 50歳代 女性 介護保険：要介護5
病名：筋萎縮性側索硬化症 (Amyotrophic Lateral Sclerosis 以下 ALS)
既往歴：頸椎脊柱管狭窄症術後、高血圧症
家族状況：義父母、夫、長女夫婦、孫2人、次女と同居
生活歴：県内生まれ、職業は美容師、病前の生活歴等の詳細は不明
利用しているサービス：訪問診療、訪問看護、訪問リハビリ、訪問介護、重度訪問介護

Step1 事例のまとめ

壮年期にALSと診断され在宅生活を希望していたA氏は、進行に伴い全介助・人工呼吸器管理となり、窒息や肺炎で度々入院した。ケアの細かさや時間的負担から在宅では看護師の負担や事業所調整に困難があったが、地域と多職種の支援により在宅療養を継続することができた。

Step2 基本となるもので事例を評価・検討（一部抜粋）

患者の見方・とらえ方		評価内容・今後の課題
患者観	いのちの平等と個人の尊厳	A氏と家族の思いを尊重し、多職種で共有しながら必要な医療(救急・レスパイト入院など)を適切に受けられるよう支援したことで、疾患にとられず安心して医療につながる体制が整っていた。
人間観	変革し発達する存在	気管切開に迷い涙を見せていたA氏が、家族や医療者との関わりの中で不安を表出し情報を求めるようになり、双方の働きかけが相互に作用して、A氏の主体性を支える意思決定の関係が形成されていた。
	患者の立場に立つ看護	A氏と家族の思いを尊重した関わりはできていたが、本音や生活史までは十分に聴けていなかった。ケアに追われ、話を聞く時間が持てなかったことが背景にあると考えられる。このブックレットの取り組みは、患者の立場に立つ視点を取り戻す機会となった。
	患者の要求から出発する	A氏・家族・ヘルパー・看護師それぞれの思いに揺れがある中で、気持ちを受け止め傾聴することが、次のケアにつながる支えとなっていた。

※患者の見方・とらえ方 一部省略。詳細はさらに看護ホームページよりご確認ください。

Step3 「基本となるもの」の視点で考察 患者の見方・とらえ方

人間観	患者を一人の人間として個人の尊厳をまもり、生きる権利を保障した取り組みから、「人間は社会のありようや周囲の人たちの働きかけの影響を受けて変わることができる」ととらえることができた。
民主性	それぞれの専門性を最大限に発揮しつつ、切れ目のない支援体制をつくり、多職種協働の力を地域で発揮できるのは、共同のいとなみを理念に取り組む民医連の強みである。
医療観	患者のニーズを知り多職種間で情報を共有することで患者に寄り添い、適切な段階で患者に合わせた医療、療養環境を提供出来ている患者が主人公で中心的な存在であると再認識することが出来た。

Step4 社会の見方・とらえ方

いのち	全介助・人工呼吸器管理が必要となり、窒息や肺炎で入院を繰り返す厳しい状況であっても、本人の“生きたい場所で生きる”という願いはいのちの声そのものであった。ケアは細やかで時間を要し、在宅では看護師の負担や事業所調整の困難も大きかった。しかし、患者の希望を最優先に患者とともに、訪問看護・リハビリ・診療所・病院・地域の多職種協働でA氏のいのちを支える営みを途切れさせることなく続けることができた。
憲法	13条「個人の尊重・幸福追求権・公共の福祉」 ・個人として尊重され、その人らしく生きるうえでも多くの多様な医療・介護従事者が関わっている。 ・ALSの有無にとられず、適切な医療・介護の支援を受け、在宅生活を継続出来るような様々な支援を提供。 25条「生存権」 ・病状が進行していく中でも、その都度、患者の訴えや家族の希望を聞き、何が最善かを考え、様々な制度を利用することで住み慣れた自宅での生活を継続出来ている。
綱領	『人権を尊重し、共同のいとなみとしての医療と介護・福祉をすすめ、人びとのいのちと健康を守ります』 『地域・職域の人びとと共に、医療機関、福祉施設などとの連携を強め、安心して住み続けられるまちづくりをすすめます』 様々な医療・介護・福祉が連携し、患者・家族を多方面から支援している事を実感出来る事例であった。

Step5 民医連の看護の継承・発展

ALSを抱える患者が今後の人生を歩むためには、一つの医療機関だけでなく、多様な機関が連携し、患者のニーズを尊重した在宅生活支援を継続していく必要がある。疾患や経済状況に関わらず、他職種・行政と協力し、その人らしい生活を支えることは、民医連のめざす看護・介護の実践そのものである。
日々の業務にとどまらず、地域や社会に目を向け、「なんのために、誰のために」を問い続ける姿勢が求められる。ALSをはじめとする難病患者の生活支援制度や社会保障の拡充、健康に生きる権利の実現をめざし、医療・介護を通じてすべての患者が安心して療養できる社会をつくるために、事例からの学びを生かし、民医連のめざす看護を発信していく。